

ぼくの日本語遍歴

リービ英雄

日新期

B

2000

5

世界中の
日本語

朝から太陽の光がまぶしくて、アパートメント・ビルを出て自転車に乗り、見上げると、新宿区ぐらいの面積のあるキャンパスの上に広がる大空はその前の日と変らないうる色だった。低い建物という建物の窓の中には、世界のどこよりも早く、白いコンピュータが並んでいた。最先端だけれども殺風景な新しい研究所を通りすぎて、バスケットに入っている日本語の文学書がはねる音を聞きながら、やしの木の下にまっすぐつづく道を走った。スペインの修道院風に広い縁側に囲まれている校舎の片隅にある「アジア語文科」の教室で日本文学を講じていた日、スタンフォード大学は不思議に輝いていた。

小さな窓からさしこむ明るすぎる常夏の光と、それに照らされて、もつとも純粋なテキストとして光る縦文字群。朝は日本書紀、昼は大江健三郎。そして「アジア語文科」の隣の教室の、同じようにカリフォルニアの強い日差しが模様となって落ちるテーブルの上で、朝は「詩経」、昼は「阿Q正伝」が開かれて、多人種の読み手たちによってそれぞれ分析のメスが入れられていた。

アメリカの大きな大学がたいがいそうであるように、スタンフォードも「アメリカ合衆国」から浮遊したような、学問の独立王国の様相をもっていた。広大な大陸の自然の中で、単なる象牙の塔というだけではなく、それが所属する国家の

(1)

存在を忘却させるほど、読み手のパラダイスのような環境だった。

やしの木のある学問の別天地の中で、古代と近代の日本文学のテキストが、おそらく実際の日本以上に、厳密に読まれて、「公平」に分析されていたのである。そしてそのこととさらには、読解者は自分が読解する島国の「異国言語」、漢字仮名混じりの文によって、自分の知性あるいは感性を表現しようと、その言語を自分で書こうとすることだけは、なかった。十九世紀この方の「東洋学」において、「土人」というニュアンスが完全にぬぐい去られているとはいきれない「ネーティブ」の言語に対してそのような意向を漏らすことは、むしろタブーでさえあった、とぼくは振り返って、思う。「日本文学研究者」として生活を営んでいた最後の年、やしの木の下を自転車で走りながら、読むことと書くこと、そして日本の「内」と「外」についてよく考えたものだった。それまでは二十年にわたって、アメリカ大陸の東海岸と西海岸の別天地にあるジャバノロジーの研究室と、研究室というもののから限りなく遠く離れた新宿の木造アパートと路地裏との間を行ったり来たりしていた。英語に翻訳されていて英語によって分析される「Japanese literature」と、現代文学の内容そのものが町角ごとに聞こえて、常に暫定的な「日常」の中で目に入る実際の日本の都市との間に、人生を真二つに分けて、一九六〇年代の終りごろから八〇年代の終りごろまで

は生きていた。

そしてあちらの半分をなしていた、純然たる「外」から眺めて、こちらのテキストを純然たる対象としてつきあうという場所、やしの木と人工芝生からなる、シリコン・バリーの大自然の中に広がるキャンパスを離れる時期が近づいていた。読むことの豊かさが制度的に保証される別天地に背を向けるのも、名残り惜しかった。しかし、一生日本の「外」で読みつつけるか、「内」に入りこんで書きはじめるか、という選択が迫ってきていた。四十歳の誕生日の前にアメリカの教授職を辞し、はじめて日本語の小説を発表した。

なぜ、わざわざ、日本語で書いたのか。「星条旗の聞こえない部屋」を発表してからよく聞かれた。母国語の英語で書いた方が楽だろうし、その母国語が近代の歴史にもポスト近代の現在でも支配的言語なのに、という意味合いがあつた。質問の中にあつた。

日本語は美しいから、ぼくも日本語で書きたくなった。十代の終り頃、言語学者が言うバイリンガルになるのに遅すぎたが、母国語がその感性を独占支配しきった「社会人」以前の状態で、はじめて耳に入った日本語の声と、目に触れた仮名混じりの文字群は、特に美しかった。しかし、実際の作品を書く時、西洋から日本に渡り、文化の「内部」への潜戸としてのことばに入りこむ、いわゆる「越境」の内容を、もし

英語で書いたならば、それは日本語の小説の英訳にすぎない。だから最初から原作を書いた方がいい、という理由が大きかった。壁でもあり、藩戸にもなる、日本語そのものについて、小説を書きたかったのである。

ぼくにとっての日本語の美しさは、青年時代におおよそ日本人が口にしてきた「美しい日本語」とは似ても似つかなかった。日本人として生まれたから自らの民族の特性として日本語を共有している、というような思いこみは、ぼくの場合、許されなかった。純然たる「内部」に、自分が当然のことのようにいるという「アイデンティティー」は、最初から与えられていなかった。そしてぼくがはじめて日本に渡った昭和四十年代には、生まれた時からこのことを共有しない者は、いくら努力しても一生「外」から眺めて、永久の「読み手」でありつづけることが運命づけられていた。母国語として日本語を書くか、外国語として日本語を読んで、なるべく遠くから、しかしできれば正確に、「公平」に鑑賞する。

あの図式がはじめて変ったのは、もちろん、ぼくのように西洋出身者が日本語で書きはじめたからではない。その前に、日本の「内部」に在しながら「日本人」という民族の特性を共有せずに日本語のもう一つ、苛酷な「美しさ」をかち取った人たちがいたからだ。

日本語の作家としてデビューしてまもない頃に、在日韓国

あの会話をした日から一ヶ月経って、李良枝は急死した。ぼくの記憶の中で、彼女は若々しい声として残っている。「日本人」として生まれなかった、日本語の感性そのものの声を、思い出す度に、「母国語」と「外国語」とは何か、一つのことばの「美しさ」は何なのか、そのわずかの一部をかち取るために自分自身は何を犠牲つたのか、今でもよく考えさせられる。

そして日本と西洋だけでは、日本語で世界を感じて日本語で世界を書いたことにはならない、という事実にも、おくればせながらあの頃気づきはじめた。

日本から、中国大陸に渡り、はじめて天安門広場を歩いたとき、あまりにも巨大な「公」の場所の中で、逆に私小説的な語りへと想像力が走ってしまった。アメリカとは異った形で自らの言語の「普遍性」を信じてやまない多民族の大陸の都市の中を、歩けば歩くほど、一民族の特性であると執拗なほど主張されてきた島国の言語でその実感ををつづりたくなかった。まずは、血も流れた大きな敷石の踏みごたえと、そこに隣接した路地の、粘土とレンガを固めた塀と塀の質感を、どうすれば日本語で書けるか、という描写の意欲を覚えた。そのうちに、アメリカ大陸と中国大陸の二つのことばを媒体とした感情が記憶の中で響く一人の主人公の物語を、想像するようになった。

人作家の李良枝から電話があった。李良枝は、『由照』の舞台にもなった、「母国」での何度目かの留学を終えて東京に戻り、ぼくがジャバノロジの別天地を捨てて、日米往還の時代を含めて十いくつ目に移住した新宿の木造アパートと、さほど遠くない場所に移るようになった。「韓国人」の日本文学の先輩が「アメリカ人」の日本文学の新人を激励してくれる、という電話だったのだが、話しが弾み、そのうちに、『由照』の主題でもあった、日本語の感性を運命のように持ったために、「母国」の言語でありながら「母国語」にはならなかった韓国語について、ぼくがたずねてみた。

動詞の感覚は違う、という話になった。韓国語では、日本語と比べて、いわゆる「大和ことば」に相当するような動詞を使わないで漢字の熟語(する)を言うことがどれだけ多いか。ソウルの学生が交わす白熱した議論の中でたびたび問題にされる「うらぎり」にしても、それを「わざわざ」漢語の「叫聲」つまり「背反」すると言うのは、自分の感覚とは違う、ということを李良枝が言った。

「日本人」として生まれなかった、そのために日本の「内部」において十分な排除の歴史を背負うことになった日本語の作家が、日本の都市から「母国」の都市に渡ったところ、そこで耳に入ることばは、漢語と、土着の、日本語風を受けとめれば「仮名」的に響く表現のバランスが、どうしても異質なものとして聞こえてしまう、と。

古代のロマンではなく同時代の場所としての中国大陸の感触を日本語の小説で体現するという試みは、半世紀前に、上海に渡っていた武田泰淳にも、また満州に渡っていた安部公房にもあった。一九九〇年代に日本から渡ったとき、その半世紀間に繰り返された断絶の痕跡としてラディカルに変えられた文字の異質性を、まず受け止めざるをえなかった。「東」や「丰」や「多」という形体がいたるところでこちらの目に触れて、それが叫聲(ハム、ハム、ハム)、背反(ハム、ハム、ハム)の耳に入ったときは、またズレの感触が違うだろう。私小説はおろか小説そのものからもっとも遠く離れた、すぐれた「公」の場所、十億単位の人を巻きこんだ歴史の場所で、その歴史に接触して崩壊した家族の記憶が頭の中で響いている。そうした一人の歩行者のストーリーを、どのように維持して、書けるのか。日本から、北京に渡り、その中心を占める巨大な空間を歩きながらそう考えたとき、母国語の英語はもはや、そのストーリーの中の記憶の一部と化していた。

北京から東京にもどった。新宿の部屋にもどった。アメリカ大陸を離れてから、六年が経っていた。新宿の部屋の中で、二つの大陸のことばで聞いた声を、次々と思いだした。

「天安門」という小説を書きはじめた。

二つの大陸の声を甦らせようとしているうちに、外から眺めていた「Japanese literature」すら記憶に変わり、世界がすべて今の、日本語に混じる世界となった。

(2)

(3)